

六 反田遺跡

第14次発掘調査報告書

2017年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第454集

六 反田遺跡

第14次発掘調査報告書

2017年3月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日ごろからご理解、ご協力を賜り感謝申し上げます。

市内には、旧石器時代から近世にいたるまで数多くの埋蔵文化財が残されております。当教育委員会といたしましても、先人たちの残してきた貴重な文化遺産を保護し、保存・活用を図りながら、次の世代に引き継いでいくことは、市民協働による仙台の住みよいまちづくりに欠かせない大切なことと考えております。

本報告書は、地下鉄南北線富沢駅の東側で都市整備が進められている、「仙台市富沢駅周辺土地区画整理事業」地内にある六反田遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

これまで六反田遺跡からは、縄文時代中期中葉から後期初頭の竪穴住居跡や配石遺構などと共に、魚骨やオニゲルミ等の自然遺物が出土し、生業活動を考えるうえで貴重な資料となっています。また、北海道～東北北半部で確認されている古墳時代後期の「袋状の掘り込み」を持つ木棺墓などの重要な発見もありました。

ここに報告する調査成果が、地域の歴史を解き明かしていくための貴重な資料となり、広く活用され、文化財に対するご理解と保護の一助になれば幸いです。

また、発掘調査及び調査報告書の刊行に際しまして、特に地権者である庄子誠司様には、発掘調査の重要性をご理解いただき、ご協力いただきました。

最後になりましたが、未曾有の被害をもたらした東日本大震災から、6年の月日が過ぎました。仙台市では震災からの復興向け、「ともに、前へ仙台～3・11からの再生～」を掲げて、復興事業を進めてまいりました。平成27年12月には、被災した東部と中心部を結ぶ地下鉄東西線が営業を開始するなど、復興に向けた動きが一層進んでおります。そうした中、発掘調査及び調査報告書の刊行にあたり、多くの方々のご協力、ご助言をいただきましたことを深く感謝申し上げ、刊行の序といたします。

平成29年3月

仙台市教育委員会
教育長 大越 裕光

例 言

1. 本書は、「共同住宅建設」に伴い仙台市教育委員会が実施した六反田遺跡第14次発掘調査の発掘調査報告書である。
2. 報告書作成業務は、仙台市教育委員会の委託を受け、国際文化財株式会社が行った。
3. 本書の作成及び編集は、仙台市教育委員会生涯学習部文化財課調査指導係 工藤信一郎、渡部弘美の監理のもと、国際文化財株式会社が担当した。
4. 本書の執筆は下記のとおりである。

第1章第1節、第3章第1節2…工藤信一郎(仙台市教育委員会)

第1章第2節、第2章、第3章第1節1・3、第2節、第4章、第5章第1節～第4節、第6章…田口雄一(国際文化財株式会社)

第5章第5節…伊藤裕基(国際文化財株式会社)

編集は、田口雄一が担当し、伊藤裕基が協力した。

5. 石器の実測・石材の鑑定及び観察表作成については、工藤信一郎、伊藤裕基、熊谷亮介(東北大大学院)が行った。
6. 発掘調査及び報告書の作成にあたり、以下の方々にご協力を賜った。記して感謝の意を表す次第である。(敬称略)
庄子誠司、大木建設株式会社、野村不動産株式会社仙台支店
7. 調査及び報告書作成に関する諸記録、出土遺物等の資料は仙台市教育委員会で一括保管している。

凡 例

1. 本書の土色については「新版 標準土色帖」2000年度版(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)を使用した。
2. 第2図の地形図は国土交通省国土地理院発行「仙台南東部」「仙台南西部」1:25000を使用した。
3. 遺構図中の座標値は世界測地系「平面直角座標第X系」を基準としている。図中及び本文中に記載の方位の北は、座標北を示す。
4. 図版中のレベルは海拔高度(T.P.)を示す。
5. 層位名は基本層序をローマ数字、遺構内堆積物については算用数字を使用した。なお、I区・III区の基本層序については調査時に使用した算用数字をそのまま用いている。
6. 本書の検出遺構については次の略号を使用した。
SD:溝跡 SK:土坑 SX:性格不明遺構 P:ビット
7. 遺構観察表において()は残存値を示す。
8. 本書の出土遺物の分類と登録には次の略記号を使用し、分類ごとに登録番号を付した。
A = 縄文土器 Ka = 剥片石器 Kb = 磨製石器 Kc = 碾石器 P = 土製品
9. 遺物観察表において()は残存値を示している。
10. 遺物実測図の縮尺は1/3とし、剥片石器は2/3とした。
11. 石器・石製品の実測図に使用したスクリーン・トーンは以下の通りである。



節理



敲打痕

12. 揭載した遺物写真の縮尺は原則として遺物実測図に準じた。

本文目次

序文 例言 凡例

第1章 調査の概要.....	1	3. 河川跡.....	8
第1節 調査に至る経過.....	1	第2節 VI層上面検出遺構と出土遺物.....	10
第2節 調査要項.....	1	1. 土坑.....	10
第2章 遺跡周辺の環境.....	2	2. 溝跡.....	13
第1節 遺跡の位置と地理的環境.....	2	3. 性格不明遺構.....	15
第2節 遺跡周辺の歴史的環境.....	2	4. ピット.....	16
第3章 調査の方法と経過.....	3	第3節 X層上面検出遺構と出土遺物.....	16
第1節 調査の方法.....	3	1. 土坑.....	16
1. 調査区の設定.....	3	第4節 XV層上面検出遺構と出土遺物.....	17
2. 調査の方法.....	3	1. ピット.....	17
3. 調査の経過.....	4	第5節 包含層出土遺物.....	19
第2節 報告書の作成.....	4	1. XII層出土遺物.....	19
第4章 基本層序.....	4	2. XIII層出土遺物.....	20
第5章 調査の概要と成果.....	8	3. XV層出土遺物.....	20
第1節 IV層上面検出遺構と出土遺物.....	8	第6章 まとめ.....	25
1. 土坑.....	8		
2. ピット.....	8		

挿図目次

第1図 六反田遺跡と周辺の遺跡.....	2
第2図 調査区配置図.....	3
第3図 基本層序図.....	5・6
第4図 IV層上面遺構配置図.....	9
第5図 IV層上面 SK1・2 土坑平面図・断面図.....	10
第6図 VI層上面遺構配置図.....	11
第7図 VI層上面 SK3～8 土坑平面図・断面図.....	12
第8図 VI層上面 SK9～12 土坑平面図・断面図.....	13
第9図 VI層上面 SD1～11 溝跡平面図・断面図.....	14

第10図 VI層上面 SX1 性格不明遺構平面図・断面図.....	15
第11図 VI層上面 SX2 性格不明遺構平面図・断面図.....	16
第12図 X層上面 SK13 土坑平面図・断面図.....	17
第13図 X層上面 SK13 土坑出土遺物.....	17
第14図 XV層上面 遺構配置図.....	18
第15図 XII層遺物包含層出土遺物(1).....	21
第16図 XII層遺物包含層出土遺物(2).....	22
第17図 XIII層遺物包含層出土遺物.....	23
第18図 XV層遺物包含層出土遺物(1).....	24
第19図 XV層遺物包含層出土遺物(2).....	25

写真図版目次

写真図版1 基本層序・調査区全景・土坑(1).....	27
写真図版2 土坑(2)・河川跡・溝跡・性格不明遺構・ 包含層遺物出土状況.....	28

写真図版3 包含層出土遺物(1).....	29
写真図版4 包含層出土遺物(2).....	30

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

仙台市南部の富沢地区は、昭和62年の地下鉄南北線の開業以降、道路網の整備や宅地化が急速に進む地域となっていた。このようななか、仙台市が事業主体となった土地区画整理事業が具体化し、「仙台市富沢駅周辺土地区画整理事業」が計画され、事業地内に所在する六反田遺跡をはじめとする14遺跡を対象として、平成6年から平成25年まで継続して発掘調査が行われ、縄文時代から近世に至る幅広い年代を対象とした調査が行われてきた。

今回の六反田遺跡第14次調査は、六反田遺跡内で計画された共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。平成28年7月27日付けで、野村不動産株式会社仙台支店から仙台市太白区大野田五丁目31番3・4・5地内において、共同住宅建設の埋蔵文化財の取り扱いについて協議書が提出された。建設予定地は六反田遺跡の南西部にあたり、地下鉄南北線建設に伴って昭和56・61年に行われた第2次調査I区と、東に隣接するIII区に挟まれている。

仙台市教育委員会では、本工事により遺跡の地下構造が損なわれると判断し、建設工事に先立って本発掘調査を必要とする旨の回答文を平成28年7月29日付H28教生文第103-045号で送付した。その後、教育委員会と事業者の協議の結果、計画された建物部分のうち前回第2次調査I・III区に挟まれた未調査範囲を対象に記録保存を図るために本発掘調査を実施することになった。

第2節 調査要項

調査要項

遺跡名：六反田遺跡（宮城県遺跡登録番号 01189）

所在地：宮城県仙台市太白区大野田五丁目31番3、4、5

調査面積：156m²（対象面積381m²）

調査原因：共同住宅建設

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：仙台市教育委員会生涯学習部文化財課

文化財課調査指導係 主任 工藤信一郎 専門員 渡部弘美

調査組織：国際文化財株式会社

調査員 田口雄一 調査補助員 伊藤裕基 計測員 志賀昌弘 計測補助員 庄子輝男

調査期間：平成28年9月12日～平成28年11月17日

整理期間：平成28年11月17日～平成29年3月24日

第2章 遺跡周辺の環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

六反田遺跡第14次調査区は、地下鉄南北線富沢駅の北東約120m、仙台市太白区大野田地区に位置する。

大野田地区は、郡山低地と呼称される南縁を名取川、北縁を広瀬川、北西縁を青葉山丘陵により区画された沖積地の名取川下流の北岸部に所在する。周辺は太白山を源とする笊川などの小河川が低地内を曲流しており、これら河川の影響で自然堤防、旧河道、後背湿地が複雑に入り組んだ地形が形成されている。

今次調査区は旧河道～自然堤防上に立地し、標高は現況で約12mである。調査以前の土地利用は宅地である。

第2節 遺跡周辺の歴史的環境

本遺跡の所在する大野田地区周辺は仙台市内でも数多くの遺跡が分布する地域で、六反田遺跡のほかにも大野田遺跡、大野田官衙遺跡、元袋遺跡、伊古田遺跡、伊古田B遺跡、大野田古墳群、下ノ内遺跡、王ノ壇遺跡、皿屋敷遺跡、袋前遺跡等が知られている。これらの遺跡からは繩文時代～近世の遺構・遺物が多数確認されている。

当地区及び周辺の歴史的環境の詳細については『下ノ内遺跡・春日社古墳・大野田官衙遺跡ほか - 仙台市教委』(仙台市教委 2011) を参照されたい。

六反田遺跡の発掘調査は、1976年に実施された第1次調査から今回の調査まで第14次を数える。今次調査は、昭和56年・61年に発掘調査を行った第2次調査I区とIII区に挟まれた範囲を対象としている。I区からは平安時代の竪穴住居跡、土坑、溝跡、ピット、繩文時代後期の遺物包含層が検出されている。III区からは近世の溝跡、平安時代の土坑、溝跡、古墳時代後期～奈良時代の小溝状遺構群、奈良時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、繩文時代後期の竪穴住居跡、土坑、配石、ピットが検出されている。



No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	六反田遺跡	自然堤防	集落跡	繩文(中～後)・弥生・平安・近世	11	昭和斎遺跡	自然堤防	集落跡・祭祀跡	繩文(後)・奈良～近世
2	下ノ内遺跡	自然堤防	集落跡・墓跡	繩文(中～後)・弥生・中世	12	富沢遺跡	後背湿地	水田跡・散布地	平安～近世
3	伊古田遺跡	自然堤防	集落跡	繩文～平安	13	室町遺跡	後背湿地	集落跡・水田跡	平安～近世
4	大野田古墳群	自然堤防	古墳・集落跡	繩文～古墳・平安・中世	14	山手遺跡	自然開拓	水田跡	繩文(後)・弥生・古墳・平安・近世
5	袋前遺跡	自然堤防	集落跡	繩文～古墳～平安	15	御前塚遺跡	自然堤防	集落跡	平安～中世
6	大野田官衙遺跡	自然堤防	官衙跡	古墳～奈良	16	上野遺跡	自然堤防	官衙跡	繩文・奈良・平安・近世
7	伊古田B遺跡	自然堤防	祭祀跡	古墳・奈良～平安					
8	八重田遺跡	自然堤防	集落跡・祭祀跡	繩文・弥生・奈良～近世					
9	大野田C遺跡	自然堤防	集落跡	繩文(後)・古墳・平安					
10	上ノ堀遺跡	自然堤防	集落跡・祭祀跡	繩文(後)・弥生・中世					

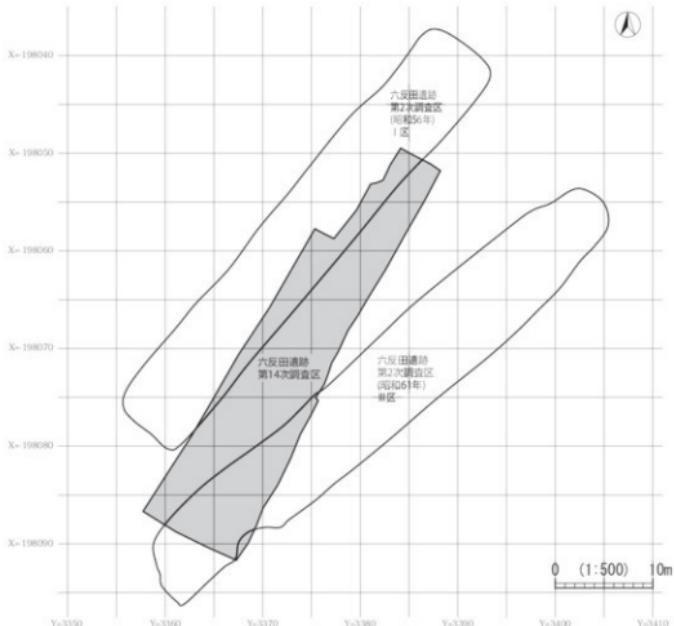
第1図 六反田遺跡と周辺の遺跡

第3章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

1. 調査区の設定

調査は、建築計画範囲内の第2次調査I区(昭和56年調査)とIII区(昭和61年調査)に挟まれた範囲を対象とし、381m²の調査区を設定した。調査区の北西側はI区、南東側はIII区と重複しており、重複部分は表土掘削後の範囲確認にとどめ、重複部分を除外した156m²の調査を行った。



第2図 調査区配置図

2. 調査の方法

表土掘削は事前に仙台市教育委員会の立会いのもと行われ、IV層上面までの掘削を完了した状態から調査を開始した。IV層～VI層上面までの遺構検出と精査は人力で行い、VI層上面遺構の調査後に繩文時代の調査面であるXI層上面まではバックホウ0.25mにより掘り下げを行った。XI層～XVII層上面の遺構検出と精査は人力で行った。

作図はトータルステーションによる機械測量を主体に三次元(x、y、z)座標の記録をとり、土層断面図は手尖測と写真実測を併用した。写真撮影は35mmのカラーリバーサル、モノクロネガとデジタルカメラを併用した。

調査終了後は、事前打合せにより埋め戻しは事業者が行った。

3. 調査の経過

準備作業として8月23日から25日まで重機を使用して、表土除去作業を行った。その後9月12日から、隣接調査区の調査で古代の遺構確認面であったIV層～VI層上面での遺構検出と精査を人力にて行った。VI層の調査終了後の10月18日・19日に、重機を使用して縄文時代の遺構確認面であるXII層上面までの掘削を行った。その後人力にて、XV層までの遺構検出と精査を行った。

XV層調査終了後調査区中央北側に6m×2mの下層調査区を設定し、人力によって掘り下げを行い、標高8.7mで礫層を確認した。礫層の一部を掘り下げさらに礫層が続く状況を確認し、11月10日に調査を終了した。

第2節 報告書の作成

国際文化財株式会社東北支店において、出土遺物、遺構図面の整理作業を行った。基礎整理作業終了後、報告書作成のため出土遺物の登録・実測図作成・写真撮影と個別遺構図を作成した。その後、遺構・遺物図版の作成、原稿執筆、編集作業を行った。整理・報告書作成中は必要に応じて作業内容の確認・協議を行った。縄文土器・石器の実測図・トレース図については、教育委員会職員が仙台市向田埋蔵文化財整理室において点検を行った。

第4章 基本層序

今次調査区の基本層序は、第2次調査I区の基本層序を基に分層を行い、調査区南側では第2次調査III区の基本層序を一部参考とした。I区基本層序は14層に大別され、III区は11層に大別される。今次調査で分層された層序は16層で、I区・III区との対比によりIV層～XII層の14層に大別され、IV層はa～c層に細別された。I区・III区1～3層に対比される層序は、削平により今次調査では確認していない。

以下、各層序の特徴を記載し、I区・III区基本層と対比が可能な層についてはその旨を記載する。

最上層は現代の盛土である。

IV層：調査区の全面で確認された。確認面の標高は11.10～11.32mである。10YR4/2灰黄褐色粘土質シルトを基調とし、にぶい黄褐色粘土を多量に含む。さらに酸化鉄、マンガン粒を多量に含むIVa層、酸化鉄とマンガン粒を含むIVb層、いずれも含まないIVc層に細別される。IVc層は南側では確認されていない。層厚はIVa層が5～15cm、IVb層が2～20cm、IVc層が2～30cmである。IVa層上面で土坑、ピット、河川跡を検出した。I区・III区4a～c層に対比される。

V層：調査区のほぼ全面で確認された。確認面の標高は10.71～11.10mで、南側が高くなる。10YR4/3にぶい黄褐色シルト質粘土を基調とし、褐灰色粘土を少量含む。砂粒を多量に含み、北側は酸化鉄を含む。層厚は2～27cmで、南側が厚い。I区・III区5層に対比される。

VI層：調査区のほぼ全面で確認された。確認面の標高は10.85～10.93mで、南側が若干高くなる。10YR3/3暗褐色粘土を基調とし、暗褐色シルト質粘土を多量に含む。酸化鉄を含み、炭化物を微量に含む。層厚は7～25cmで、南側は薄くなる。土坑、溝跡、性格不明遺構、ピットを検出した。I区・III区6層に対比される。

VII層：調査区の全面で確認された。確認面の標高は10.50～10.78mである。10YR4/2灰黄褐色粘土を基調とし、暗褐色粘土を少量、酸化鉄を多量に含む。層厚は8～46cmで、中央北側が最も厚くなる。I区・III区7層

第3図 基本層序図

に對比される。

VII層：調査区の全面で確認された。確認面の標高は 10.22 ~ 10.78m で、南側が高くなる。10YR3/2 黒褐色粘土を基調とし、にぶい黄褐色粘土を含む。酸化鉄を多量、炭化物を微量に含む。層厚は 4 ~ 30cm である。I 区・III 区 8 層に對比される。

IX層：調査区の全面で確認された。確認面の標高は 10.12 ~ 10.50m で、南側が高くなる。10YR4/3 にぶい黄褐色粘土を基調とし、暗褐色粘土を含む。炭化物を微量に含み、北側は酸化鉄を多量に含む。層厚は 7 ~ 26 cm である。I 区 9 層、III 区 9a・b 層に對比される。

X層：調査区の全面で確認された。確認面の標高は 9.99 ~ 10.62m で、南側が高くなる。10YR3/3 暗褐色粘土を基調とし、にぶい黄褐色粘土ブロックを多量、炭化物を微量に含む。層厚は 3 ~ 27cm である。調査区西壁の断面観察で土坑が掘りこまれることを確認した。I 区・III 区 10 層に對比される。

XI層：調査区の全面で確認された。確認面の標高は 9.71 ~ 10.41m で、南側が高くなる。10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルトを基調とし、灰黄褐色粘土を少量、酸化鉄と炭化物を微量に含む。土性は北側の河川跡に向かってシルトから砂に漸移的に変化する。層厚は 12 ~ 65cm である。I 区 11a・b 層、III 区 11 層に對比される。

XII層：調査区の南端を除く範囲で確認された。確認面の標高は 9.25 ~ 10.88m で、南側が高くなる。10YR3/3 暗褐色シルト質粘土を基調とし、灰黄褐色粘土を多量、径 3 ~ 10cm の礫と酸化鉄を少量含む。北側の河川跡付近はグライ化する。層厚は 8 ~ 46cm である。I 区・III 区 12 層に對比される。縄文時代後期の遺物包含層である。

XIII層：調査区の南側を除く範囲で確認された。確認面の標高は 9.18 ~ 10.08m である。10YR3/2 黒褐色粘土を基調とし、灰黄褐色粘土を微量に含む。酸化鉄を含み、炭化物を少量含む。下面是堆積がやや乱れる。層厚は 4 ~ 30cm である。I 区 13 層に對比される。縄文時代後期の遺物包含層である。

XIV層：調査区の南側を除く範囲で確認された。確認面の標高は 8.93 ~ 10.10m である。10YR4/2 灰黄褐色粘土を基調とし、にぶい黄褐色シルト質砂と砂粒を多量に含む。酸化鉄と炭化物を微量に含む。層厚は 12 ~ 110cm である。

XV層：調査区の南側で確認された。確認面の標高は 9.80 ~ 10.40m である。土性、混入物の差異により、a ~ c 層に細別される。XV a 層は 10YR3/3 暗褐色粘土を基調とし、砂粒を極多量、灰黄褐色シルト質粘土を少量含む。径 3cm の礫を多量に含み、炭化物を微量に含む。XV b 層は 10YR3/3 暗褐色を基調とし、径 3 ~ 15cm の礫と砂粒を極多量、炭化物を微量に含む。XV c 層は 10YR4/2 灰黄褐色粗砂を基調とし、径 5cm の礫を含み、酸化鉄を少量含む。層厚は XV a 層が 7 ~ 34cm、XV b 層が 6 ~ 28cm、XV c 層が 60cm 以上である。XV a 層上面でピットを検出した。XV a 層と XV b 層は、縄文時代後期の遺物包含層である。

XVI層：調査区の南端で確認された。確認面の標高は 9.67 ~ 9.93m である。10YR4/3 にぶい黄褐色粘土を基調とし、砂粒を極多量含む。層厚は 37cm 以上である。

XVII層：基底礫層。径 10 ~ 50cm の礫を基調とし、粗砂を含む。確認面の標高は 8.02 ~ 8.77m で、南東から北西に向かって低くなる。層厚は 105cm 以上である。

第5章 調査の概要と成果

本章では、調査によって検出した遺構、遺物について報告する。IV層上面、VI層上面では土坑、溝跡、性格不明遺構、ピット、河川跡を検出し、X層上面では土坑、XV層上面ではピットを検出した。これら検出遺構からは、所属時期が比定できる遺物は出土していないが、隣接するI区・III区の調査成果からIV層上面、VI層上面遺構は古墳時代後期～平安、XV層上面遺構は縄文時代後期と考えられる。このうち、XV層上面で検出した土坑1基は調査区西壁の観察よりX層から掘り込まれていることを確認した。XII層・XIII層・XV層は縄文時代後期の遺物を含む遺物包含層である。XII層とXIII層は調査区の中央部で確認し、XV層は調査区の南側で確認している。

各遺構は個別に報告するが、ピットに関しては一括して報告する。

第1節 IV層上面検出遺構と出土遺物

本節では、IV層上面で検出した土坑2基、河川跡、ピット25基について報告する。遺物は、土坑1基から土師器小片が出土しているのみで、図示できる遺物はない。

1. 土坑（第5図）

SK1 土坑（第5図） 調査区の南側に位置する。平面形は不整形で、長軸方位はN-20°-Eである。検出規模は長軸152cm、短軸116cm、深さ31cmである。断面形はU字形で、壁面は内湾して立ち上がる。底面はやや起伏する。堆積土は2層に分層した。遺物は出土していない。

SK2 土坑（第5図） 調査区の中央に位置する。平面形は不整長方形で、長軸方位はN-51°-Eである。検出規模は長軸200cm、短軸152cm、深さ7cmである。断面形は浅い皿型で、壁面は緩やかに立ち上がる。底面は起伏する。堆積土は単層である。遺物は底面から土師器小片が出土しているが、図示できる遺物はない。

2. ピット（第4図）

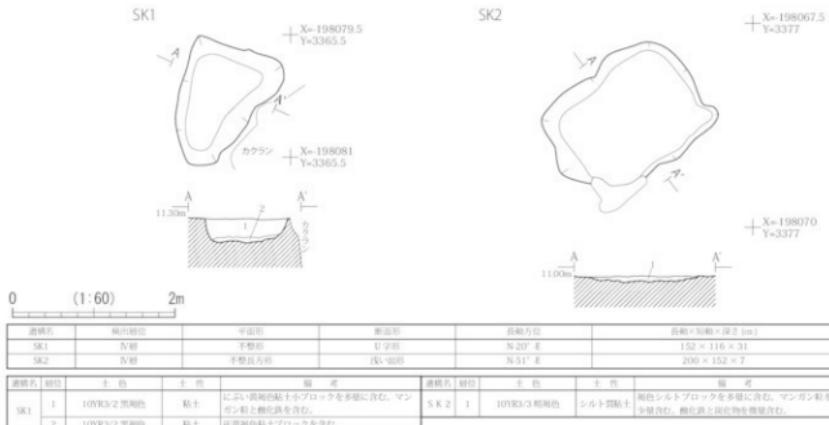
調査区中央部～南側で25基検出した。平面形は円形14基、楕円形11基で、断面形はいずれもU字形である。検出規模は、円形が直径15～26cm、深さ8～29cm、楕円形が長軸16～52cm、短軸12～24cm、深さ8～44cmである。堆積土は単層で、柱痕跡は検出していない。遺物は出土していない。

3. 河川跡（第3・4図）

調査区北側で、東流する河川跡の南肩の一部を検出した。調査は平面精査後に、調査区東壁に沿ってトレチを設定し断面観察を行った。検出規模は東西280cm、南北720cm、深さ170cmである。底面は安全を考慮し、完掘していない。壁面は下位は内湾して立ち上がり、中位から上位は外傾して立ち上がる。堆積土は5層に分層された。1層は、2.5GY4/1 暗オリーブ灰色砂を基調とする現代の埋戻し土か堆積土である。礫を多量に含み、グライト化する。2層は2.5GY4/1 暗オリーブ灰色砂を基調とし、2.5GY5/1 オリーブ灰色砂と互層をなす。粗砂と炭化物を微量、木根を多量に含み、グライト化する。3層はN4/0 灰色粘土質シルトを基調とし、酸化鉄を含む。砂と木根を少量含み、グライト化する。4層は7.5Y5/2 灰オリーブ色砂を基調とし、7.5GY4/2 灰オリーブ色砂と互層をなす。炭化物を微量に含み、グライト化する。5層は7.5Y4/1 灰色シルト質粘土を基調とし、基本層VII層・IX層ブロックを含み、グライト化する。遺物は出土していない。



第4図 IV層上面遺構配置図



第5図 IV層上面 SK1・2 土坑平面図・断面図

第2節 VI層上面検出遺構と出土遺物

本節ではVI層上面で検出した土坑10基、溝跡11条、性格不明遺構2基、ピット30基について報告する。遺物は、性格不明遺構2基から土師器小片が出土しているのみで図示できる遺物はない。

1. 土坑(第7・8図)

SK3 土坑(第7図) 調査区の南端に位置する。東側は擾乱に削平される。平面形は不整円形と考えられ、長軸方位はN 50°-Eである。検出規模は径161cm、深さ12cmである。断面形は浅いU字形で、壁面はやや内湾して立ち上がる。底面は平坦で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

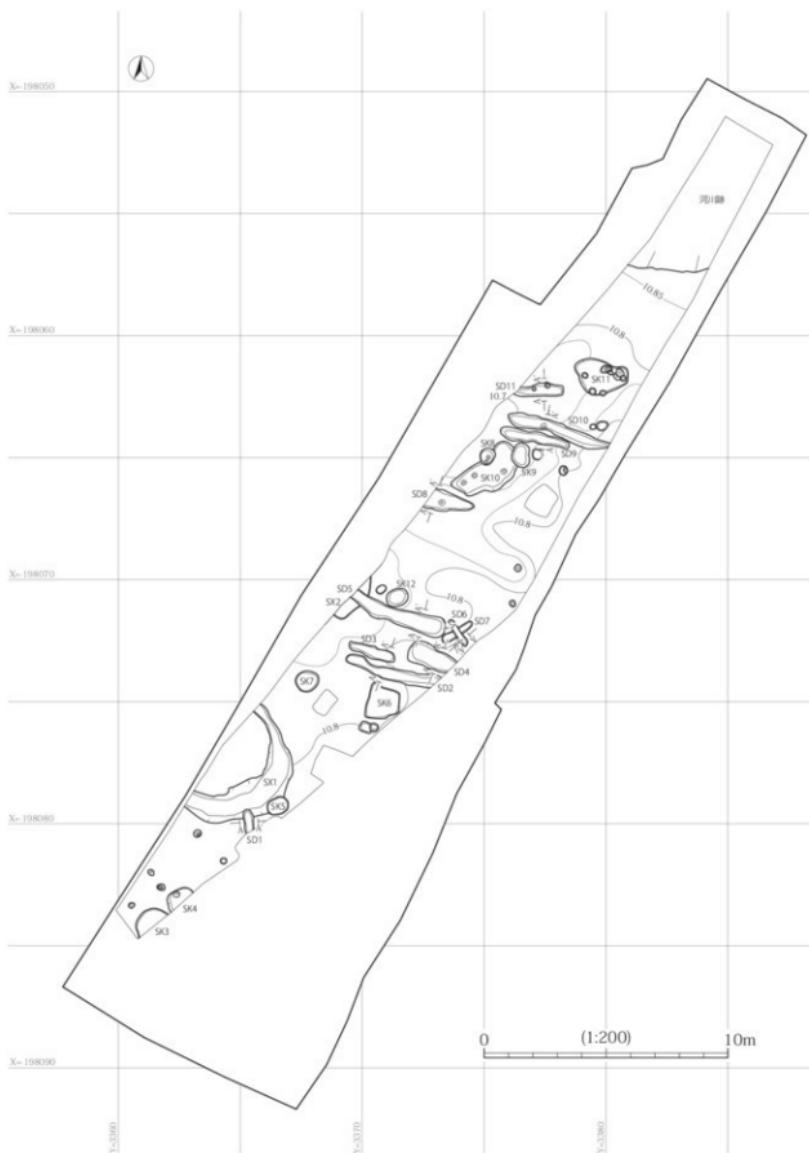
SK4 土坑(第7図) 調査区の南端に位置する。東側は擾乱に削平される。平面形は円形と考えられる。検出規模は直径115cm、深さ25cmである。断面形は浅いU字形で、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、西側にピット状の落ち込みがある。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SK5 土坑(第7図) 調査区の南側に位置する。SK1と重複関係にあり、本遺構が新しい。平面形は梢円形で、長軸方位はN 65°-Eである。検出規模は長軸90cm、短軸68cm、深さ10cmである。断面形は逆台形で、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SK6 土坑(第7図) 調査区の中央やや南側に位置する。平面形は不整形で、長軸方位はN 14°-Eである。検出規模は長軸148cm、短軸130cm、深さ13cmである。断面形は逆台形で、壁面はやや内湾して立ち上がる。底面は平坦で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SK7 土坑(第7図) 調査区の中央やや南側に位置する。平面形は円形である。検出規模は直径94cm、深さ14cmである。断面形はU字形で、壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は平坦である。堆積土は2層に分層した。遺物は出土していない。

SK8 土坑(第7図) 調査区の中央に位置する。SK10、P56・57と重複関係にあり、本遺構が新しい。平面形は円形である。検出規模は直径71cm、深さ7cmである。断面形は皿形で、壁面は緩やかに内湾して立ち上がる。底



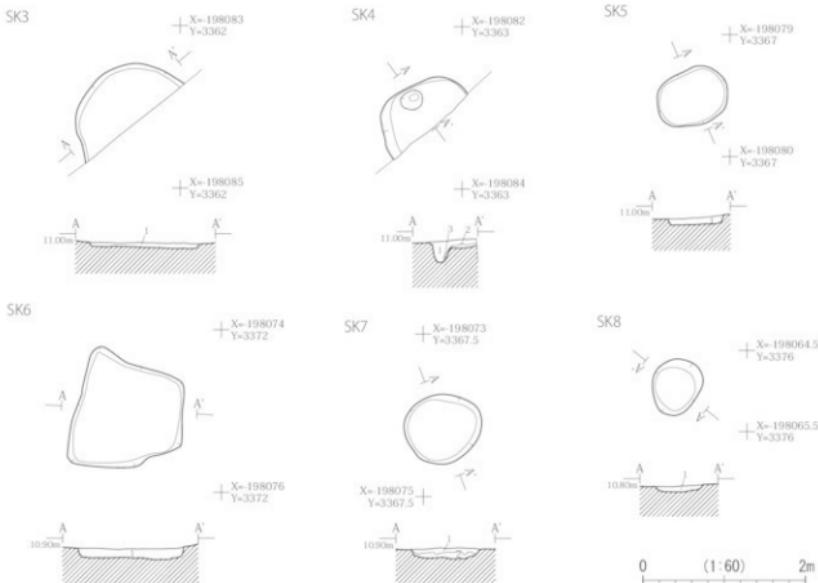
第6図 VI層上面遺構配置図

面は平坦で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SK9 土坑(第8図) 調査区の中央に位置する。SK10と重複関係にあり、本遺構が新しい。平面形は不整梢円形で、長軸方位はN・10°・Wである。検出規模は長軸100cm、短軸70cm、深さ7cmである。断面形は皿型で、壁面は緩やかに立ち上がる。底面は平坦で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SK10 土坑(第8図) 調査区の中央に位置する。SK8・9、P54～56・58と重複関係にあり、P54～56・58より新しく、SK8・9より古い。平面形は不整長方形で、長軸方位はN・55°・Eである。検出規模は長軸285cm、短軸137cm、深さ8cmである。断面形は浅い皿型で、壁面は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SK11 土坑(第8図) 調査区の中央北側に位置する。P43～48・51・52と重複関係にあり、本遺構が古い。平面形は不整形で、長軸方位はN・83°・Eである。検出規模は長軸200cm、短軸150cm、深さ8cmである。断面形は浅い逆台形で、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

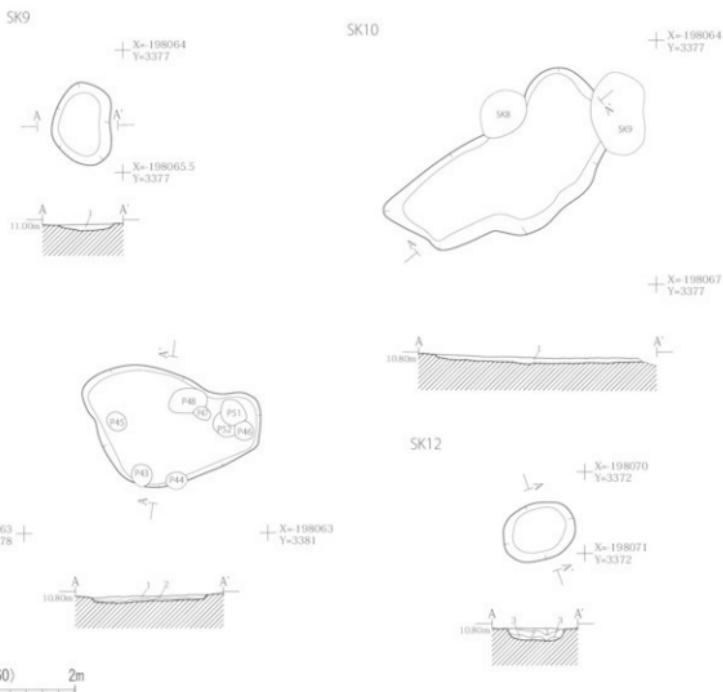


遺構名	検出部位	平面形	断面形	長軸方位	底面×側面×深さ(cm)
SK3	VII部	半楕円形	凹U字形	N・50°・E	161×(72)×12
SK4	VII部	円形	凹U字形	-	115×(62)×25
SK5	VII部	楕円形	逆台形	N・65°・E	90×68×10
SK6	VII部	不規方形	逆台形	N・14°・E	148×130×13
SK7	VII部	円形	U字形	-	94×85×14
SK8	VII部	円形	皿形	-	71×59×7

遺構名	部位	土色	土性	備考	遺構名	部位	土色	土性	備考
SK3	1	10YR4/2灰褐色	粘土	褐褐色シルト質粘土ブロックを多量に含む。鐵鉢を少し含む。	SK6	1	10YR4/3に近い灰褐色	シルト質粘土	灰褐色粘土ブロックを多量に含む。
SK4	1	10YR4/2灰褐色	粘土	灰褐色シルト質粘土ブロックを含む。	SK7	1	10YR4/2灰褐色	粘土	黒褐色粘土ブロックを多量に含む。鐵鉢を微量含む。
	2	10YR4/2灰褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土ブロックを少量含む。		2	10YR4/2灰褐色	粘土	にごい灰褐色粘土ブロックを含む。
SK5	1	10YR4/3に近い灰褐色	粘土	灰褐色シルト質粘土ブロックを多量に含む。鐵鉢を微量含む。	SK8	1	10YR4/2灰褐色	粘土	にごい灰褐色粘土ブロックを多量に含む。

第7図 VI層上面SK3～8土坑平面図・断面図

SK12 土坑(第8図) 調査区の中央に位置する。平面形は楕円形で、長軸方位は N-73°-E である。検出規模は長軸 91cm、短軸 70cm、深さ 15cm である。断面形は U 字形で、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。堆積土は 3 層に分層した。遺物は出土していない。



遺構名	検出部位	平面形	断面形	長軸方位	長軸×短軸×深さ (cm)
SK9	VII層	半楕円形	U字形	N 73°-W	100 × 70 × 7
SK10	VII層	半長方形	U字形	N 55°-E	285 × 137 × 8
SK11	VII層	不整形	浅V字形	N 43°-E	200 × 150 × 8
SK12	VII層	楕円形	U字形	N 73°-E	91 × 70 × 15

遺構名	部位	土色	土性	備考
SK9	1	10YR4/2 黄褐色	粘土	に少く黄褐色粘土小ブロックを多量に含む。炭化物を微量含む。
SK10	1	10YR4/2 黄褐色	粘土	黒褐色粘土ブロックと共に少く黄褐色粘土ブロックを多量に含む。
SK11	1	10YR3/1 黄褐色	粘土質シルト	炭酸塗灰土質シルトを多量に含む。砂粒を含む。酸化鉄を微量に含む。炭化物を微量含む。
	2	10YR4/2 黄褐色	粘土	黒褐色粘土ブロックを少額含む。酸化鉄を多量に含む。炭化物を微量含む。
SK12	1	10YR4/2 黄褐色	粘土	黒褐色粘土小ブロックを少量含む。砂粒を含む。炭化物を微量含む。
	2	10YR3/1 黑褐色	粘土	灰褐色粘土小ブロックと炭化物を少量含む。
	3	10YR4/2 黄褐色	粘土	暗褐色粘土小ブロックを少量含む。

第8図 VI層上面 SK9～12 土坑平面図・断面図

2.溝跡(第6・9図)

SX1 溝跡(第6・9図) 調査区南側に位置する。SX1 と重複関係にあり、本遺構が新しい。北端は調査区内で収束し、南側は擾乱に削平される。方向は N-8°-W で、検出規模は長さ 90cm、幅 5cm、深さ 8cm である。断面形は皿形で、堆積土は單層である。遺物は出土していない。

SD2 溝跡（第6・9図） 調査区の中央に位置する。西端は調査区内で収束し、東側は擾乱に削平される。方向は N-73°-W で、検出規模は長さ 381cm、幅 56cm、深さ 7cm である。断面形は皿型で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

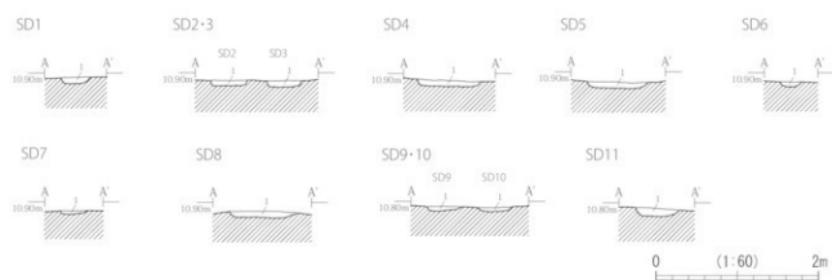
SD3 溝跡（第6・9図） 調査区の中央に位置する。両端は調査区内で収束する。方向は N-72°-W で、検出規模は長さ 195cm、幅 50cm、深さ 9cm である。断面形は皿型で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD4 溝跡（第6・9図） 調査区の中央に位置する。西端は調査区内で収束し、東側は擾乱に削平される。方向は N-63°-W で、検出規模は長さ 190cm、幅 95cm、深さ 7cm である。断面形は皿型で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD5 溝跡（第6・9図） 調査区の中央に位置する。SX2 と重複関係にあり、本遺構が新しい。東端は調査区内で収束し、西側は調査区外へ延びる。方向は N-67°-W で、検出規模は長さ 400cm、幅 85cm、深さ 10cm である。断面形は皿型で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD6 溝跡（第6・9図） 調査区の中央に位置する。SD7 と重複関係にあり、本遺構が新しい。両端は調査区内で収束する。方向は N-34°-W で、検出規模は長さ 125cm、幅 27cm、深さ 5cm である。断面形は皿型で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD7 溝跡（第6・9図） 調査区の中央に位置する。SD6 と重複関係にあり、本遺構が古い。両端は調査区内で収束する。方向は N-58°-E で、検出規模は長さ 143cm、幅 37cm、深さ 4cm である。断面形は皿型で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。



遺構名	縦目付	形状	断面形	方位	既定 × 検定 × 深さ (cm)
SD1	V1B	直線	直型	N 8° W	690 × 35 × 8
SD2	V1B	直線	直型	N 73° W	(381) × 56 × 7
SD3	V1B	直線	直型	N 72° W	195 × 50 × 9
SD4	V1B	直線	直型	N 63° W	(190) × 95 × 7
SD5	V1B	直線	直型	N 67° W	400 × 85 × 10
SD6	V1B	直線	直型	N 34° W	125 × 27 × 5
SD7	V1B	直線	直型	N 58° E	143 × 37 × 4
SD8	V1B	直線	直型	N 77° W	620 × 85 × 8
SD9	V1B	直線	直型	N 77° W	290 × 52 × 6
SD10	V1B	直線	直型	N 69° W	1430 × 63 × 6
SD11	V1B	直線	直型	N 89° W	624 × 56 × 10

遺構名	縦目付	土色	土性	備考	遺構名	縦目付	土色	土性	備考
SD1	I	10YR4/3 に J1 黄褐色	粘土	黄褐色粘土ブロックを多量に含む。炭化物と鈣化物を微量含む。	SD7	I	10YR4/3 に J1 黄褐色	粘土	黄褐色粘土ブロックを多量に含む。鈣化鉄を少量含む。炭化物を微量含む。
SD2	I	10YR4/3 に J1 黄褐色	シルト質粘土	黄褐色粘土ブロックを含む。	SD8	I	10YR4/2 黄褐色	粘土	黄褐色粘土ブロックを多量に含む。炭化物を微量含む。
SD3	I	10YR4/3 に J1 黄褐色	シルト質粘土	黄褐色粘土ブロックを多量に含む。	SD9	I	10YR3/2 黑褐色	粘土	灰青褐色粘土ブロックを多量に含む。炭化物を微量含む。
SD4	I	10YR3/2 黑褐色	粘土	灰青褐色粘土ブロックを多量に含む。炭化物と鈣化物を微量含む。	SD10	I	10YR3/2 黑褐色	粘土	にごい灰褐色粘土ブロックを含む。炭化物を微量含む。
SD5	I	10YR4/2 黄褐色	粘土	にごい黄褐色粘土ブロックを少量含む。	SD11	I	10YR3/2 黑褐色	粘土	にごい灰褐色シルト質粘土ブロックを少量含む。鈣化鉄を含む。

第9図 VI層上面 SD1～11溝跡断面図

SD8 溝跡（第6・9図） 調査区の中央やや北側に位置する。P53と重複関係にあり、本遺構が古い。東端は調査区内で収束し、西側は調査区外へ延びる。方向はN-77°-Wで、検出規模は長さ205cm、幅85cm、深さ8cmである。断面形は皿型で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

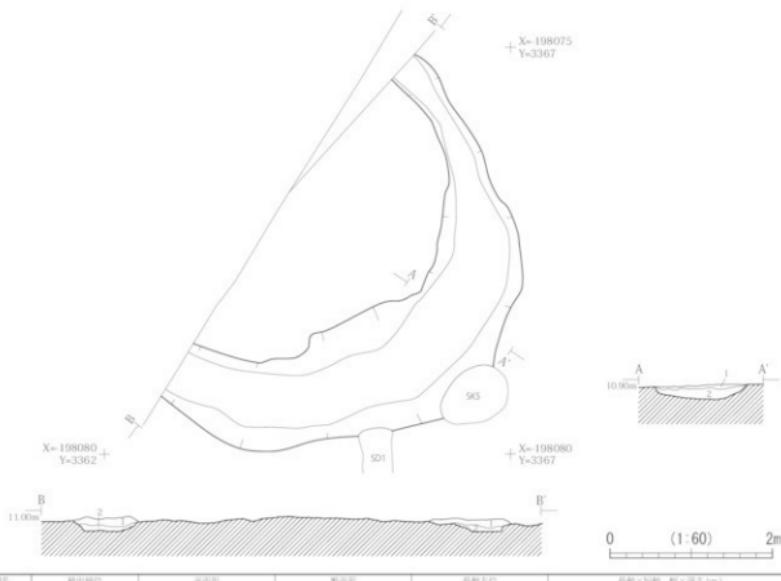
SD9 溝跡（第6・9図） 調査区の北側に位置する。両端は調査区内で収束する。方向はN-77°-Wで、検出規模は長さ290cm、幅52cm、深さ6cmである。断面形は皿型で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD10 溝跡（第6・9図） 調査区の北側に位置する。P59と重複し、本遺構が新しい。西端は調査区内で収束し、東側は調査区外へ延びる。方向はN-69°-Wで、検出規模は長さ430cm、幅63cm、深さ6cmである。断面形は皿型で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD11 溝跡（第6・9図） 調査区の北側に位置する。P49と重複関係にあり、本遺構が古い。東端は調査区内で収束し、西側は調査区外へ延びる。方向はN-89°-Wで、検出規模は長さ204cm、幅56cm、深さ10cmである。断面形は皿型で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

3. 性格不明遺構（第10図）

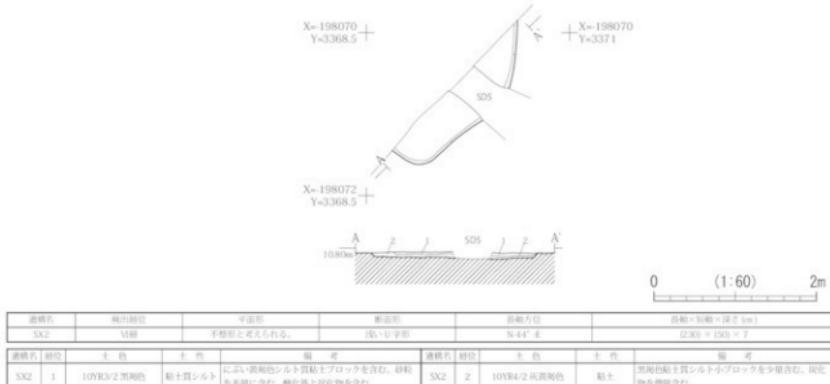
SX1 性格不明遺構（第10図） 調査区の南側に位置する。SK5、SD1と重複関係にあり、本遺構が古い。円弧状に溝がめぐる平面形で、西側は調査区外へ延びる。検出規模は外径524cm、内径405cm、溝幅32～162cm、深さ5～24cmである。溝の北側部分は、東側、南側と比べて幅は狭く、浅くなる。断面形はU字形で、壁面は外



第10図 VI層上面 SX1 性格不明遺構平面図・断面図

傾して立ち上がる。堆積土は2層に分層した。溝の内側には付属する遺構もなく、整地なども行われていない。遺物は土器小片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SX2 性格不明遺構(第10図) 調査区の中央に位置する。SD5と重複関係にあり、本遺構が古い。西側は調査区外へ続く。平面形は不整形と考えられる。長軸方位はN-44°-Eである。検出規模は長軸230cm、短軸50cm、深さ7cmである。断面形は浅いU字形で、壁面は外傾して立ち上がる。堆積土は2層に分層した。遺物は出土していない。



第11図 VI層上面 SX2 性格不明遺構平面図・断面図

4. ピット(第6図)

調査区全体で30基検出した。平面形は円形が20基、楕円形が9基、圓丸長方形が1基である。断面形はU字形が26基、皿形が3基、浅い皿型が1基である。検出規模は円形が直径18~47cm、深さ4~27cm、楕円形が長軸20~48cm、短軸15~31cm、深さ7~28cm、圓丸長方形が長軸54cm、短軸43cm、深さ13cmである。堆積土はいずれも單層で、柱痕跡は検出していない。遺物は出土していない。

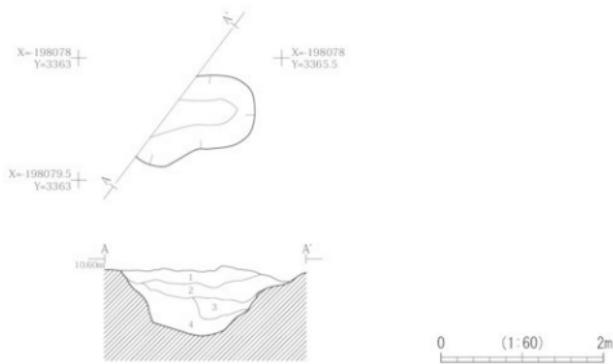
第3節 X層上面遺構と出土遺物

XV層上面で検出した土坑1基が、調査区西壁の断面観察でX層より掘り込まれていることを確認したため、X層上面遺構として報告する。

1. 土坑(第12・13図)

SK13 土坑(第12・13図) 調査区の南側に位置する。西側は調査区外へ延びる。平面形は不整形円形と考えられる。長軸方位はN-85°-Eである。検出規模は長軸112cm、短軸89cm、壁面で確認した深さ85cmである。断面形はU字形で、壁面は下部は外傾して立ち上がり、中位で屈曲し、上部は緩やかに外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は4層に分層した。遺物は繩文土器が出土しており、そのうち1点を図示した。

第13図1は注口土器である。器形は淺鉢型で、頸部が屈曲して口縁部は大きく内傾し、波状口縁と考えられる。口縁部下半～頸部に半裁された円筒状の貼付がなされ、注口をしている。口縁頂部から垂下する把手が成形され、頸部～胴部上端に貼付けられている。文様は、口縁部には沈線が、胴部には条線文が用いられている。



第12図 X層SK13土坑平面図・断面図



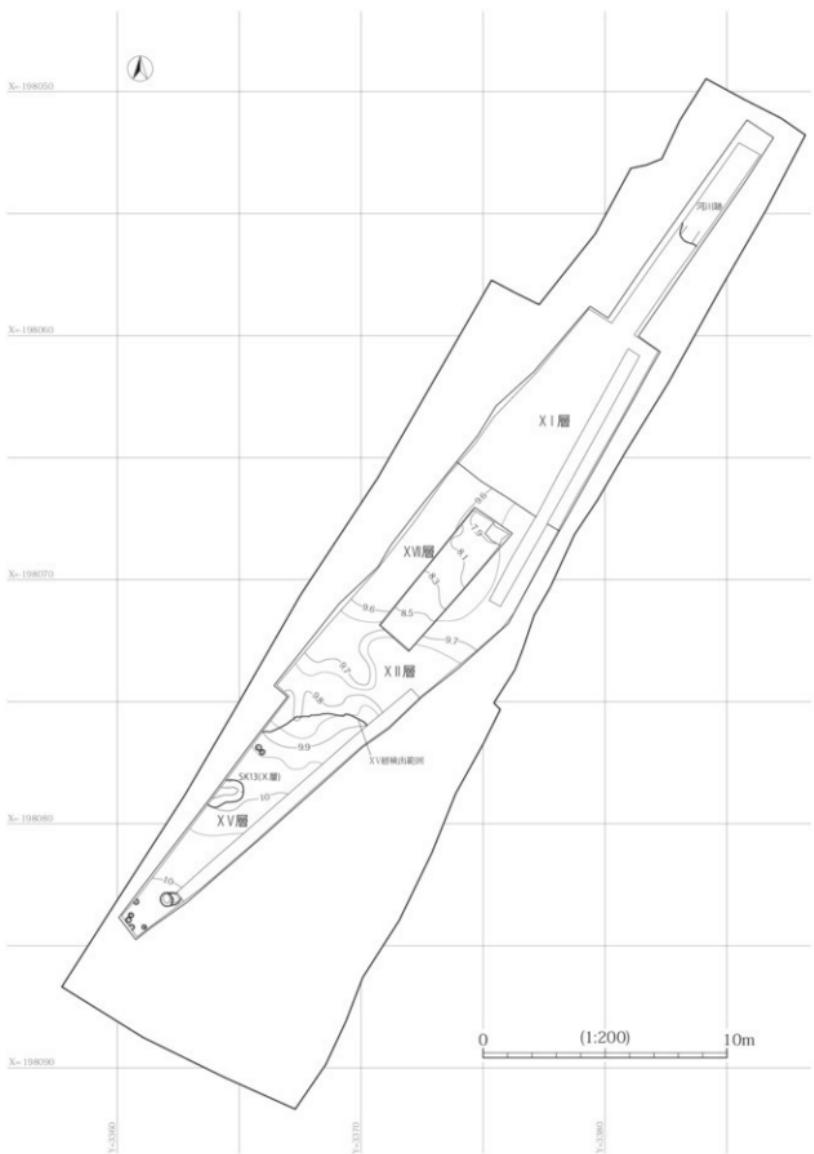
第13図 X層SK13土坑出土遺物

第4節 XV層上面検出遺構と出土遺物

本節では、XV層上面で検出したピット9基について報告する。

1. ピット (第14図)

調査区南側のXV層上面で9基検出した。平面形は円形が8基、梢円形が1基である。断面形はU字形が8基、皿型が1基である。検出規模は円形が直径18~56cm、深さ11~29cm、梢円形が長軸50cm以上、短軸52cm、深さ14cmである。このうち、P64では柱痕跡を検出した。堆積土はP64を除き單層である。遺物は出土していない。



第14図 XV層上面遺構配置図

第5節 包含層出土遺物

本節では遺物包含層である基本層XⅡ層・XⅢ層・XV層出土遺物について報告する。

基本層XV層は、調査区の南側でXⅠ層の下面で確認した。調査区の中央部ではXⅠ層の下面でXⅡ層を確認し、XⅡ層の下面でXⅢ層を確認している。XV層は確認されなかった。XV層はa～c層に細別され、このうちXVa層とXVb層は縄文時代後期の遺物を含む遺物包含層である。また、XⅡ層とXⅢ層も、縄文時代後期の遺物を含む遺物包含層である。今回確認した範囲は、北側の荒川に向かって傾斜する地形であったと考えられる。

遺物は、XⅡ層・XⅢ層からは縄文土器、土製品、石器が出土し、XV層からは縄文土器、石器が出土している。遺物の出土量は、XⅡ層は比較的まとまって出土しているのに対し、XⅢ層とXV層は分布がまばらで小片が多い。また、XⅡ層・XⅢ層の遺物はXV層に近接する地点で多く出土している。

包含層出土遺物のうち、器形や文様等に特徴がみられる土器と土製品、石器について報告する。

1. XⅡ層出土遺物（第15・16図）

XⅡ層からは縄文土器、土製品、石器が出土しており、縄文土器22点、土製品5点、磨製石器1点を図示した。縄文土器は深鉢が22点である。

深鉢のうち、第15図2～12、第16図1～3は口縁部である。第15図5・7・12、第16図1は波状口縁である。口縁部は直立気味もしくはやや外傾するものが多い。第15図7の口縁部は大きく外反し、第15図1・5・6・12は内傾する。第15図1の胴部下半は外傾して開き、口縁部～胴部上半はやや内傾する。底部に網代痕をもつ。第15図2は環状突起を有するとみられる。口縁部文様は、隆線を施したもの（第15図10）、沈線を施したもの（第15図4・8・11）、円形の刺突を施したもの（第15図12）、沈線及び円形の刺突を施したもの（第15図3・7）、I字状孔隆沈線文を施したもの（第15図2・9）と、口縁部に文様帶をもたず地文を施したもの（第15図1・5、第16図1～3）がある。胴部文様は、条線文（第15図1・5・6・12）、網目状撚糸文（第15図4、第16図1・2）、LR縄文（第15図2・10）、RL縄文（第15図8）、L縄文（第15図11、第16図3）がある。第15図10～12は地文の上に沈線を施しており、10・11は沈線による区画内を磨消している。第15図12は溝状沈線を施していると思われる。第15図2はI字状孔隆沈線文直下の円形刺突を起点とした対称弧線文を施している。

第16図4～10は胴部である。地文はLR縄文が大半で、第16図7・9は撚糸文である。第16図4・7・8・10は地文の上に沈線を施している。第16図7は沈線上に輪形隆文を施している。第16図5・6は隆線を施しており、ともに鎖状隆線文となっている。磨消は第16図4・6・8・10でみられ、沈線または隆線で区画された内側を磨消していると思われる。第16図9は頭部に隆帶をもち、隆帶上及びその直下に棒状施文具による連続刺突文を施している。第16図10は胴部に膨らみをもつとみられ、LR縄文を施したのちに溝状の沈線文を施している。

土製品5点は土器片を利用した土製円盤である。LR縄文または沈線が施され、第16図11は一部周縁を研磨している。

磨製石器は磨製石斧である。上半部が欠損しており、刃部には使用によるものとみられる欠損箇所がある。

2. XⅢ層出土遺物(第17図)

XⅢ層からは縄文土器、石器が出土しており、そのうち縄文土器6点、打製石器1点、礫石器2点を図示した。縄文土器は深鉢が6点である。

深鉢のうち1～3は口縁部である。1の口縁部は直立気味で、2は外反し、3は内傾する。口縁部文様は、連続刺突列を施したもの(3)、口縁部文様帯をもたず地文を施したもの(1)がある。2は頸部に把手をもち、連続刺突列を伴う隆線を施している。胴部文様は網目状撚糸文(1)、撚糸文(2)がある。

4・5・6は胴部である。地文はLR縄文で、4は結節縄文、6は羽状縄文とみられる。5は頸部に沈線が施され、沈線上に円形刺突をもつ。頸部断面の接合面には刻目が見られる。胴部には円形刺突を起点として、対称弧線間磨消文と蛇行沈線文が交互に施されている。6は沈線で区画された内部を磨消している。

打製石器(9)は亜円礫を素材とした石核である。打面は固定で、入念な打面調整の痕跡がみられる。剥片は礫を一層するように採取されており、剥片は短く、規則的な形状とみられる。

礫石器は、8は磨石、7は軽石製石製品である。8は裏面に磨面をもち、裏面中央部及び側面の一部に敲打痕がみられる。7は表面中央部に凹みがみられる。

3. XV層出土遺物(第18・19図)

XV層からは縄文土器、土製品、石器が出土しており、縄文土器9点、土製品2点、打製石器1点、礫石器1点を図示した。縄文土器のうち、深鉢が7点、鉢が2点である。

深鉢のうち、第18図1～5は口縁部である。5の口縁部はやや外傾し、1・3は内傾、2・4は外反する。口縁部文様は、沈線を施すもの(2～4)、沈線及び円形刺突を施すもの(5)、隆線文と刺突文、その周囲に沈線を施すもの(1)がある。3は口縁部内面に沈線及び刺突を施している。4は内面に隆沈線を施している。胴部文様は、5はにLR縄文である。4は隆沈線による区画をもち、隆線の交点には円形の刺突を施している。区画内には隆沈線に沿うように連続する半規竹管文を施している。胎土に金雲母を含む。

第18図6・7は胴部である。6は地文にLR縄文を用い、重下沈線(直線と蛇行)を施している。7は頸部及び胴部にLR縄文を施し、地文の上に沈線を施している。

第18図8は鉢形土器の口縁部である。口縁～胴部が内傾する。地文は撚糸文である。地文の上に直線及び弧状の沈線と、盲孔を施している。

土製品2点は土器片を利用した土製円盤である。文様は、第18図10はRL縄文、第18図11は磨滅により不明である。

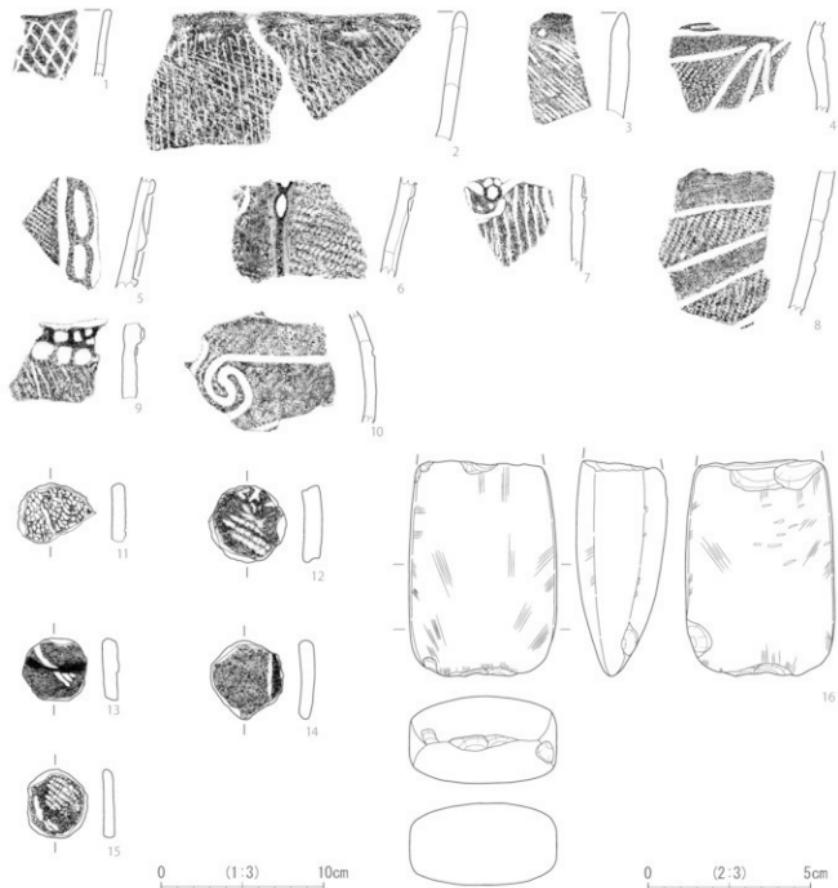
剥片(第19図1)は、背面に自然面をもち、小型の剥片を採取した後に剥離したものとみられる。末端に使用による刃こぼれがみられる。

第18図12の礫石器は、表裏両面に磨り及び敲打による凹みがみられ、下部に若干の敲打痕がみられる。



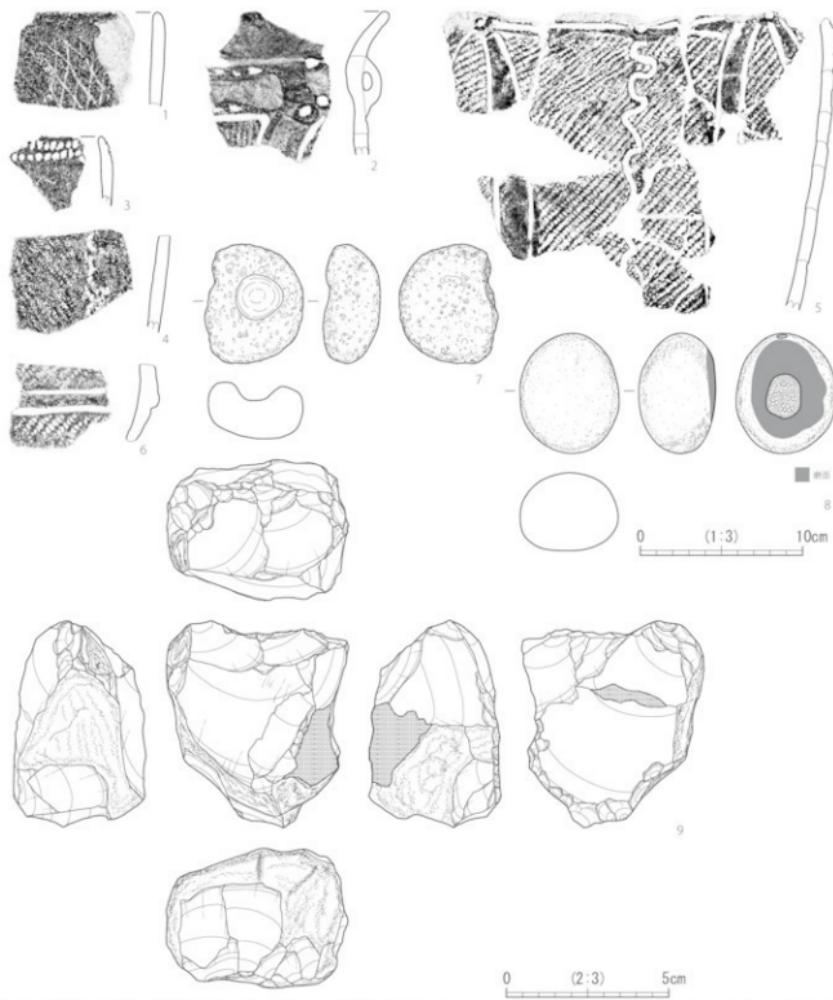
No.	登錄番号	基本形状	出土位置	種類	形態	(直径×高さ)mm	文様等	備考	写真枚数
1	A-002	XII 破	中央	繩文土器	深鉢	24.0×15.0×27.6	網目文、底部：網代文	(口付)陶片	3.8
2	A-003	XII 破	中央	繩文土器	深鉢	—×—×(10.7)	(口付)深鉢起立？ 口縁部：丁字孔縫沈編文、側面：L字縫、対角底縫文	摩滅	3.4
3	A-006	XII 破	中央	繩文土器	深鉢	—×—×(4.0)	上縫文、沈縫、凸乳		3.3
4	A-007	XII 破	中央	繩文土器	深鉢	—×—×(6.8)	(口縫)：沈縫、側面：網目状縫糸文、沈縫		3.2
5	A-009	XII 破	中央	繩文土器	深鉢	—×—×(5.7)	底の縫、側面、条縫文	摩滅	3.5
6	A-010	XII 破	中央	繩文土器	深鉢	—×—×(5.6)	条縫文？	摩滅	3.6
7	A-011	XII 破	中央	繩文土器	深鉢	—×—×(3.0)	底の縫？ 外縁：沈縫、輪形縫文、複合的幾何文、内縁：隣縫		3.7
8	A-012	XII 破	中央	繩文土器	深鉢	—×—×(5.4)	L字縫文(縫)、輪形	摩滅	3.9
9	A-018	XII 破	中央	繩文土器	深鉢	—×—×(5.3)	輪形、L字縫文、十字状花輪状縫文	摩滅	3.10
10	A-019	XII 破	中央	繩文土器	深鉢	—×—×(9.7)	(輪縫)、山根縫、近江字状拵縫文、網目-L字縫文(縫)？、沈縫、學問	摩滅	3.11
11	A-021	XII 破	中央	繩文土器	深鉢	(39.2)×—×(6.8)	1866(1866)：沈縫、網目-L字縫文、沈縫、沈縫摩滅	摩滅	3.12
12	A-022	XII 破	中央	繩文土器	深鉢	—×—×(5.2)	(1866)：学問縫、凸乳、網目-L字縫文、沈縫(不整底状沈縫)？	摩滅	3.13

第15図 XII層遺物包含層出土遺物(1)



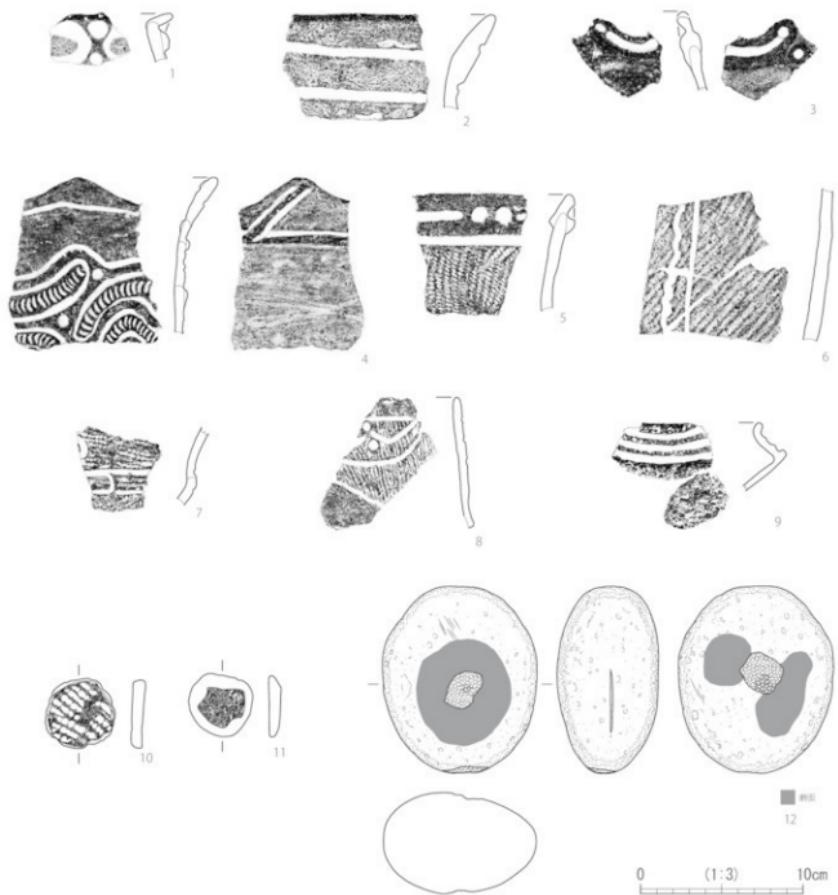
登錄番号	通称名	出土地點	種類	器形	寸法(横×縦×高さ cm)	文様等	備考	参考文献
1 A-023	XII層	中央	織文土器	圓錐	—×—×(4.1)	直紋文、網目、斜線文	摩城	3.14
2 A-026	XII層	中央	織文土器	圓錐	—×—×(7.9)	網目、直線文	摩城	3.16
3 A-030	XII層	中央	織文土器	圓錐	—×—×(6.5)	上繩文(網)	摩城	3.15
4 A-004	XII層	中央	織文土器	圓錐	—×—×(5.6)	上繩文、沈線、直線文の複合	摩城	3.17
5 A-005	XII層	中央	織文土器	圓錐	—×—×(6.9)	上繩文(網)、斜筋斜輪文、沈線	摩城	3.18
6 A-008	XII層	中央	織文土器	圓錐	—×—×(6.1)	上繩文(網)、斜筋斜輪文、沈線、摩汎	摩城	3.19
7 A-013	XII層	中央	織文土器	圓錐	—×—×(5.6)	螺旋文、直輪文、斜輪文	摩城	3.21
8 A-028	XII層	中央	織文土器	圓錐	—×—×(8.8)	LB繩文、往繩回旋、直線文の複合	摩城	3.20
9 A-029	XII層	中央	織文土器	圓錐	—×—×(4.6)	斜筋、斜輪、螺旋文、往繩回旋、直線文	摩城	3.22
10 A-024	XII層	中央	織文土器	圓錐	—×—×(6.9)	上繩文、直線斜輪文、摩汎	摩城	3.28
11 P-001	通稱名	細鉗	種類	器形	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	文様等	参考文献
12 P-002	XII層	中央	土製鉗	土製鉗	33.0×4.8×0.6	14.9	上繩文、直線一階斜輪	3.23
13 P-003	XII層	中央	土製鉗	土製鉗	4.7×4.6×1.1	30.5	上繩文	3.24
14 P-004	XII層	中央	土製鉗	土製鉗	3.8×3.9×0.6	17.9	斜輪、沈線?	3.25
15 P-005	XII層	中央	土製鉗	土製鉗	4.8×4.4×0.9	21.9	斜輪	3.26
16 登録番号	通称名	細鉗	種類	器形	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	参考文献
16 K-001	XII層	中央	青銅石斧	青銅石斧	(6.6)×4.5×2.8	150.1	直刃形、刃端に磨削面による欠損	4.1

第16図 XII層遺物包含層出土遺物(2)



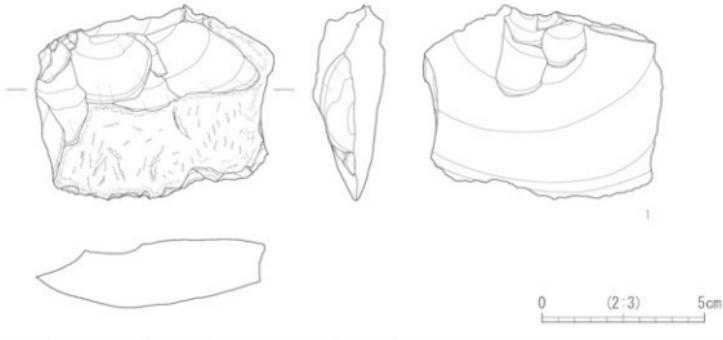
第17図 X層遺物包含層出土遺物

No.	骨器番号	基本的名	出土地點	種、形	面、縁	1件(或複数)の長さ(cm)	記述	参考	位置回数
1	A-041	XII層	中央	繩文土器	深鉢	—×—× (5.80)	側面削磨面文	摩滅	3.29
2	A-042	XII層	中央	繩文土器	深鉢	—×—× (8.80)	側部：斜板、溝削削面文、把手：削部：擦面文、輪底縫：摩の	摩滅	3.30
3	A-044	XII層	中央	繩文土器	深鉢?	—×—× (3.6)	連続的凹向		3.31
4	A-043	XII層	中央	繩文土器	深鉢	—×—× (5.9)	L型切削面(縫)		3.32
5	A-040	XII層・XV層	中央	繩文土器	深鉢	—×—× (18.0)	側面：浅縫、背孔、側部：L型縫文、縫位進行浅縫文、対称縫、側面削面縫縫に削刃口	摩り	4.2
6	A-045	XII層	中央	繩文土器	深鉢	—×—× (4.6)	輪底縫文、摩削		3.33
6a	骨器番号	通明石	種類	種、形	面、縁	2.2×2.4×0.3 (mm) 略要記	記述	参考	位置回数
7	Ku-003	XII層	中央	繩石器	斜石器	7.3×6.0×3.6 17.8	斜石	表面：中央部に2つ穴	4.7
8	Ku-002	XII層	中央	繩石器	斜石	7.4×6.0×4.7 286.2	30山頂	表面：大矢、頭・テラリ手 削面：9.9×9.9	4.6
9	Ku-002	XII層	中央	打製石器	石核	9.3×5.6×4.1 174.5	斜石	一端するよう前に斜縫、打製調整面	4.5



No.	登錄番号	基本区分	出土位置	種 別	器 形	寸法×既存×既存(㎜)	文様等	備 考	写真出典
1	A-031	XV層	南側	縹文土器	深鉢	—×—×(3.0)	縹文、斜交叉、弦紋		4.3
2	A-034	XV層	南側	縹文土器	深鉢	—×—×(5.0)	縹文		4.8
3	A-035	XV層	南側	縹文土器	深鉢	—×—×(4.0)	外沿:山形突起、内面:陰沈線、側面:陰沈線、斜面		4.4
4	A-036	XV層	南側	縹文土器	深鉢	—×—×(9.0)	縹文の縁:山形線(9.0); 深鉢:1縫(9.0); 斜沈線(平行)、側面(1.5); 斜交叉、底部(内):陰沈線、側面(内):陰沈線、斜面(内):山形線(9.0); 斜面(外):山形線(9.0)		4.9
5	A-039	XII層	南側	縹文土器	深鉢	—×—×(7.2)	1縫底部:山形、沈鉢:側面:1縫(2.2)		4.10
6	A-037	XV層	南側	縹文土器	深鉢	—×—×(9.0)	1縫縁:山形、側面(内):斜沈線(既存)		4.12
7	A-032	XV層	南側	縹文土器	深鉢	—×—×(5.0)	1縫縁:山形、既存		4.11
8	A-033	XV層	南側	縹文土器	鉢	—×—×(7.0)	斜交叉、山形、沈鉢		4.13
9	A-038	XV層	南側	縹文土器	鉢	—×—×(4.2)	1縫底部:山形	摩訖開拓者	4.14
10	登録番号	通称名:	縁切	縁 切	鉢	既生×幅×厚さ(㎜) 重量(g)	文様等	備 考	写真出典
10	P-006	XV層	南側	十割灰	十割灰	4.2×4.2×0.8 15.9	1縫縁文		4.15
11	P-007	XV層	南側	十割灰	十割灰	3.8×3.9×0.8 12.3	不明、円錐底残		4.16
12	登録番号	通称名:	縁切	縁 切	鉢	既生×幅×厚さ(㎜) 重量(g)	石 材	備 考	写真出典
12	K-001	XV層	南側	漂石層	円石	11.5×9.5×6.2 795.3	奥山田 両面中央部にタキによる凹み、その周辺にえぐり、下部に若干のタタ キ面		4.18

第18図 XV層遺物包含層出土遺物（1）



第19図 XV層遺物包含層出土遺物（2）

第6章　まとめ

- 六反田遺跡は仙台市南部、広瀬川と名取川にはさまれた沖積地である郡山低地の南部に所在し、北側を東流する名取川の支流である笊川の自然堤防上に立地する。標高は、現況で約12mである。今回の調査区は昭和57・61年度に実施した仙台市地下鉄南北線建設工事に伴う発掘調査の調査区Ⅰ・Ⅲ区に挟まれた地区である。
- 今回の調査では、縄文時代後期と古墳時代後期～平安時代と考えられる遺構を検出した。また、遺物は縄文時代後期の土器・石器、古代の土師器・須恵器が出土した。
- IV層上面では、土坑2基とピット、河川跡を検出した。遺物は土坑1基から土師器小片が出土しているのみで、遺構の年代は不明である。隣接するⅠ・Ⅲ区の調査成果から、これらの遺構は奈良・平安時代に所属すると考えられる。検出された河川跡は、笊川の旧河道と考えられる。
- VI層上面では、土坑10基、溝跡11条、性格不明遺構2基、ピットを検出した。遺物は性格不明遺構から土師器片が出土しているのみで、遺構の年代は不明である。IV層上面遺構と同様に、隣接するⅠ・Ⅲ区の調査成果から、これらの遺構は古墳時代後期～平安時代に所属すると考えられる。
- X層上面、XV層上面で検出したが、調査区壁面の観察でX層から掘り込まれていた土坑1基を検出した。出土遺物から縄文時代後期に所属すると考えられる。
- XV層上面では、ピットを検出した。遺物は出土していないが、縄文時代後期の遺物包含層であるXV層から掘り込まれていること及びⅠ・Ⅲ区の調査成果から縄文時代後期に所属すると考えられる。
- 縄文時代後期の遺物包含層であるXII層・XIII層・XV層を確認した。XV層は調査区の南側で、XII層・XIII層は調査区の中央部で確認し、XIII層はXII層の下面で確認している。確認した範囲は、北側の笊川に向けて傾斜する地形であった。
- 遺物包含層からは、縄文時代後期の深鉢・鉢・壺・注口土器・土製円盤・磨製石斧・打製石器・石核・磨石・凹石が出土している。XII層とXV層はXII層に比べて遺物の出土量が少なく小片が多い。各包含層出土遺物に時期差は見られない。

参考文献

- 相原 淳一 2009 「東北地方における縄文時代中期末葉から後期前葉に関する土器編年 -宮城県石巻市山田遺跡の調査成果から-」
『東北歴史博物館研究紀要 10』 東北歴史博物館
- 小林達雄・小川忠博 1989 「縄文土器大観」 4 後期 晩期 縄縄文 小学館
- 小林達雄他 2008 「縄観 縄文土器」 縄観 縄文土器刊行会
- 芹沢長介・坪井清足 1981 「縄文土器大成」 3 後期 株式会社講談社
- 仙台市教育委員会 1981 「六反田遺跡発掘調査報告書 -名取川下流域の縄文時代中期～平安時代の集落跡-」 仙台市文化財調査報告書第 34 集
- 仙台市教育委員会 1984 「六反田遺跡Ⅱ」 仙台市文化財調査報告書第 72 集
- 仙台市教育委員会 1987 「六反田遺跡Ⅲ」 仙台市文化財調査報告書第 102 集
- 仙台市教育委員会 1995 「六反田遺跡 -仙台市高速鉄道関係道路調査報告書IV-」 仙台市文化財調査報告書第 199 集
- 仙台市教育委員会 2000 「大野田古墳群・王ノ壇遺跡・六反田遺跡」 仙台市文化財調査報告書第 243 集
- 仙台市教育委員会 2011 「下ノ内道路・春日社古墳・大野田官衙道路ほか -仙台市富沢駅周辺地区調査事業関係道路発掘調査報告書Ⅲ-」
仙台市文化財調査報告書第 390 集
- 仙台市教育委員会 2011 「仙台平野の道路群 21・平成 22 年度発掘調査報告書」 仙台市文化財調査報告書第 392 集
- 仙台市教育委員会 2012 「六反田遺跡第 9 次調査」 仙台市文化財調査報告書第 398 集
- 仙台市教育委員会 2013 「伊古田遺跡・大野田古墳群・下ノ内道路 -仙台市富沢駅周辺地区調査事業関係道路発掘調査報告書Ⅲ-」
仙台市文化財調査報告書第 413 集
- 仙台市教育委員会 2013 「大野田遺跡・元袋遺跡・伊古田遺跡ほか -仙台市富沢駅周辺地区調査事業関係道路発掘調査報告書IV-」
仙台市文化財調査報告書第 414 集



基本層序東壁中央(西から)



基本層序東壁南側(西から)



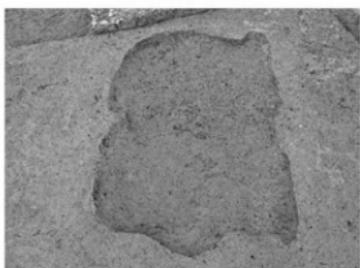
基本層序西壁(東から)



VII層上面全景(北から)



XV層上面検出状況(北から)



IV層上面SK2全景(南から)

写真図版1 基本層序・調査区全景・土坑(1)



IV層上面河川跡断面(西から)



VI層上面SK3・4全景(東から)



VI層上面SD2～5全景(東から)



VI層上面SX1断面A(南から)



VI層上面SX1全景(東から)



X層上面SK13断面(東から)



XII層遺物(A-002)出土状況(南から)



XII層上面遺物(A-003)出土状況(南から)

写真図版2 土坑(2)・河川跡・溝跡・性格不明遺構・包含層遺物出土状況



写真図版3 土坑・包含層出土遺物(1)



写真図版4 包含層出土遺物(2)

報 告 書 抄 錄

仙台市文化財調査報告書第454集

六反田遺跡第14次発掘調査報告書

2017年3月

発行 仙台市教育委員会

宮城県仙台市青葉区上杉1-5-12 仙台市役所上杉分庁舎

Tel. 022-214-8899 (文化財課)

印刷 今野印刷株式会社

宮城県仙台市若林区六丁の日西町2-10

Tel. 022-288-6123
